

博士論文の要約

氏 名 古明地樹

論文題目 橘守国絵本の研究—柏原屋の絵本出板活動と橘守国の作画法を軸に—

1, 近世〈絵本史〉の構想

本論は、近世中期の上方における絵本流行の実態解明のため、その流行の中心的役割を担った絵師の一人である橘守国と、橘守国の作品の多くを出板した書肆である柏原屋に着目し、絵師と書肆それぞれの特徴から、橘守国の作品を分析する。

「絵本」とは、絵の手本を意味する語で、絵師が作品を描く際に参照するものとして用いられたほか、絵師以外の読者が絵画的素養を身につけるために用いられた。近世期における視覚文化の基盤は 1000 種を超えて出板された絵本により整えられ、近代以降もその出板は継続する。これらの作品群は日本の視覚文化における基盤形成に大きく影響を与えた。

しかし、それらの作品には、再印、再板、相板など、複雑な成立過程が生じ、基礎的な調査が困難な場合がある。また、板本でありながら絵を主体とする作品である性質上、絵本研究の明確な学術領域が不明瞭である。さらに、多くの資料が海外に所蔵されているため、調査自体が困難な場合がある。

日本の視覚文化を解明するために、近世絵本の研究は不可欠だが、以上の理由から、これまで十分な調査研究が行われてきたとは言い難い。この状況を踏まえ、これらの絵本出板の実態を解明すること、即ち〈絵本史〉を構築することで、日本の視覚文化の実態解明に資することが、筆者の最終的な目的である。

2, 研究方法

先行研究の多くは、浮世絵研究の観点から、浮世絵師ごとに作品を分析する方法を採用してきた。これによって多くの知見が得られたが、名前の載らない絵師や、無名の絵師が制作した絵本には、書誌学的調査等の基礎的研究が及んでいないという課題が残る。

また、浮世絵師を基準として作品を整理、分析する手法は、近世絵本の出板過程をやや軽視する手法である。近世絵本の多くは、板元の依頼によって絵師が制作を行うという過程で制作されるため、絵本は、絵師の他、板元の出板活動によって特徴づけられるはずである。絵師を基準として分析する手法は、板元の出板活動に由来する絵本の特徴を、絵師の特徴に由来するものと誤解する危険性がある。

これに対し、本論では、書誌学的調査に基づく板元を基準とした絵本整理、及び板元と絵師の2つを軸とした作品分析という手法を考案し実践する。板元が出板した絵本を総合的に取り上げることで、著名な絵師の作品に偏らない絵本整理を行い、板元の出板活動を考慮することで、より正確に作品分析を行うことを目指す。

〈絵本史〉の構築という最終的な目的達成に向け、本論では、以上の考えに基づき、近世中期の大坂で活躍した板元である柏原屋を基準として絵本の調査と整理を行い、その柏原屋と絵師である橘守国の2つの面から作品の分析を行う。

3. 柏原屋と橘守国への着目

延宝期、元禄期の絵本出板流行に次いで、享保期から宝暦期頃にかけて、上方を中心とした絵本出板の流行が生じ、出板件数が俄かに増加する。この時期に大坂で大規模な絵本出板を行っていた板元が柏原屋である。宗家は渋川清右衛門であり、渋川版御伽草子を出版するなど、国文学研究においても重要な板元である。柏原屋は橘守国や大岡春卜、吉村周山ら、大坂で活動した狩野派絵師を取り上げ、数多くの絵本を出板した。また、林守篤や大森善清の作品を求板するなど、絵本株を入手することに精力的であった。

その柏原屋は、狩野派絵師である橘守国絵本の出板に力を入れていた。特に『絵本写宝袋』『絵本通宝志』『絵本直指宝』といった守国画作の絵本群は、鈴木春信ら浮世絵師をはじめとして、多くの町絵師に参照され、近代まで板を重ねた。

本研究は、この柏原屋が出板した絵本を対象に、書誌学的調査を行い、柏原屋による絵本出板について整理を行う。そして、柏原屋の出板活動に認められる特徴を明らかにする。そして、柏原屋の特徴と絵師である橘守国の特徴を踏まえて、守国画作絵本群の分析を行う。これにより、近世期の出板文化を踏まえた、より正確な守国絵本群の分析を行い、〈絵本史〉における一つの基準として位置付けることを目指す。この研究方法の過程に準じ、本論を第1部、第2部に分け、第1部では柏原屋を軸とした絵本整理、及び柏原屋の特徴分析を行い、第2部では橘守国を軸とした作品分析を行う。

4. 各章の内容

第一部、第一章「柏原屋絵本の研究—初期絵本を中心に—」では、柏原屋が絵本出板を開始する最初期の活動実態を、伝本調査から考察した。これにより、求板本を基本として柏原屋は蔵板書を蓄え、後にこれらと小袖雛形本を含めた、模様取りを目的とした絵本出板という、柏原屋の絵本出板における1つの軸が形成される。

また、第二章「柏原屋絵本蔵版目録の研究」では、絵本蔵版目録の分析により、柏原屋の絵本出板が、守国作品に見られる啓蒙的作品、春卜らの粉本的作品、これらとは異なる模様取りのための作品を軸に展開されていたことを明らかにした。この3つの作品的特徴に合わせ、柏原屋は絵本の書型等を変えており、現代における製造ラインに類した出板を行っていたと考えられる。

第三章の「柏原屋絵本出板考—類板記録を中心に—」では、柏原屋が大坂における絵本出板書肆としての立ち位置を得る過程に複数の類板に関する訴訟があったことを指摘し、絵本類板の訴訟がどのような論理で判断を行ったのか、その訴訟を柏原屋はどのように利用したかを考察した。これにより、近世中期の上方における絵本の類板訴訟において、画題の重複度合いが1つの判断基準として問われていた可能性が見出された。柏原屋は、この基準を利用し、他書肆が出板する作品を牽制していたと考えられる。

これらを踏まえ、第二部では、橘守国が柏原屋による依頼を受け、板本という媒体に狩野派の知識をどのように活用したのかを考察する。

まずは、第四章「橘守国の絵手本作品における画題の和漢分類意識—レイアウトを起点に—」において、橘守国画作の作品『絵本写宝袋』『絵本通宝志』『絵本鶯宿梅』『絵本直指宝』の四作品を対象に、守国が和漢の画題をいかに描き分けていたかを分析した。守国がこれらの差異を、

板本のレイアウトによって表現していることが判明し、上文下図形式を和画題、上図下文形式を漢画題に利用するなど、工夫を行っている。この特徴は、板元を跨いで確認されるものであり、守国作品以外に同じ特徴を認めがたいことから、守国独自の特徴と認められる。

また、第五章「『絵本通宝志』にみる橘守国の作画法—巻五上「太公望」図を中心に—」では、『写宝袋』及び『通宝志』の分析により、守国が読者の需要を見極めて図様を改変していたことが明らかになった。即ち、板本を粉本として活用する絵師は、基本的に浮世絵師をはじめとする町絵師であり、その画業は庶民層を対象とするものである。守国は、『通宝志』巻五において「賢聖障子」図という紫宸殿に描かれる画題を取り上げているが、これらを町絵師が描く事はありません。そのため守国は、絵画的教養として「賢聖障子」を取り上げながら、狩野派に継承された肖像画的図様と、故事に根差した図様を取り合わせて、活用可能な図様を提示していることが判明した。

同様に、第六章「橘守国による作画法—『絵本写宝袋』の武者絵における『前太平記』の引用—」における分析から、守国が読者層の需要を意識して作画を行っていた例として、『写宝袋』における『前太平記』の利用が認められた。守国は、元禄期に成立した平仮名百十三図本『前太平記』を利用し、図様の拡大と省略を行うことで、粉本として活用可能な作画を行った。後に、鈴木春信らが『写宝袋』の図様を利用したことが既に判明しており、画題の変容過程における大きな転換点として、守国が行った改変作業が大きな影響を与えていることが判明した。

これらの考察から、各絵本の特徴に、板元の出板活動が大きく影響していたことが明らかになった。先行研究では、守国作品を啓蒙的配慮に富む作品と位置付けていたが、これは絵師である守国ではなく、柏原屋の出板活動に認められる特徴がもたらした可能性が高い。このことは、他の絵師による作品の再考が必要であることを意味し、板元を基準とした絵本整理の必要性を強調する。